
熊本戦線異状ナシ？

闇目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熊本戦線異状ナシ？

【Nコード】

N3253S

【作者名】

闇目

【あらすじ】

熊本城攻防戦の前に表の記録から消された闘いがあった。

5121独立戦車小隊も参加したこの戦闘は、後に多大な影響を与えることになる。

（前書き）

この作品は”シリアス”ではありません。
真面目な展開を希望している人は他の作品に移動することを勧めます。

1945年に突如現れた【黒い月】。当時終結しつつあった世界大戦は予想外の形、途中中断という誰もが予想しなかった形で終息することになった。

後に【幻獣】と称されるようになった異形の存在。何所からとも無く現れては破壊と殺戮を産出し、ある程度の損傷を受けるか時間経過すると幻のように跡形も無く消え失せる化け物が、瞬く間に世界を席卷していったからだ。

1997年7月には海を挟んだ半島にて多大な損害を出しつつ撤退したのに続き、翌年8月には八代平原会戦において自衛軍は壊滅的損害を受ける。

この事実に驚愕した政府は18歳以下の学生に動員を掛け、自衛軍再編までの時間稼ぎとして使い潰す苦渋の決定を下した。

1999年、人類は絶望的な状況下にあってもなお反抗を続けていた。

九州熊本県にあるとある高校、尚敬女子高しょうけいの一角に、明らかに素人が組み上げたと推察されるプレハブが二棟あり、そしてそれに寄り添うように聳え立つ異様なテントが存在する。

人型戦車を有する5121独立戦車小隊がここに間借りして建てたささやかな砦である。

学兵は高校単位で編成されるが動員は全国各地から行われた上、迎撃の為に展開する地域は九州の限られた範囲であるが故に、この様な例はそれ程珍しくなかった。

時刻がそろそろ夕方と呼びたくなる頃、その小さいほうのプレハブの中で、高校生にしては老けて見える一人の男性が通信用のモニターである指令を受けていた。

「俺だ、貴様達に命令を伝える。前以て言っておくが、これは生徒会連合の決定事項であり貴様達に反対する権利はない」

モニターに映る男はかの老け顔の男性の上司らしい。尊大且つ横柄な物言いは上意下達の見本のようだ。

受ける側の男性はその態度には慣れているのか、表情を一切動かすことなくその指令を記録と記憶に記していく。

「必要な装備と詳細な資料は明朝には届くはずだ。適当にやれ。以上だ」

そう言つて男は一方的に通信を終わらせる。

「善行はん、どないしましたん？」

「ええ、かなり厄介な命令が下った所です。明日一番で会議を行いますから、各員に通達をお願いします、加藤さん」

微妙に異なる関西弁を使う5121の事務官、加藤 祭の問いに、この小隊の指令、善行 忠孝が何時もと変わらない声音で応えた。

しかしその表情は何時に無く厳しいものになっていた。

生徒会連合軍の命令で阿蘇特別戦区に移動となりました。

生徒会連合軍から特殊仕様のヘッドギアが人数分届きました。

同じく戦軍用特殊装備が員数分届きました。

リテルゴルロケットが4セット届きました。

翌日行われた会議は荒れた。

なにしろ阿蘇特別戦区は発生する幻獣の質は他の戦区に比べて段違いに高い。加えて現在展開している戦力に5121が加わったと

しても、その戦力指数は圧倒的に幻獣側の方に分がある。

だが善行が指令としての強権を行使することでかるうじて終息させ、会議の最後にこのように締めくくった。

「各員は早急に装備のセットアップを完了し、その操作に習熟して下さい」

その日の授業は全て取り止めとなり、阿蘇特別戦区への準備に費やされることになった。

物資の受領から4日後、ついに5121に出撃命令が下る。

「今頃になって出撃とは、どうやら従兄殿が気を利かせてくれたらしい」

三番機複座型のガンナーを勤める芝村（いむら）舞（まい）が不敵に笑う。

「セットアップにまる1日使っちゃって、2日しか練習してねえんだぞ。俺は芝村みたい何でもできるわけじゃねえんだ。不安だぜ」

「滝川は気にしすぎ。もっと肩の力を抜いていないと、現地に着く前にはてちゃうよ」

「速見さんは複座ですから。わたくし達は単座ですので其方ほど余裕はありません」

二番機軽装甲型に乗る滝川（たきがわ）陽平（ようへい）は不安が隠せない様子で、それを三番機複座型のパイロットのである速水（はやみ）厚志（あつし）がなだめているが、一番機重装甲型を駆る壬生屋（みぶや）未央（みお）の反応を見る限り、成功したとは言えないようだ。

そんな雰囲気完全に無視して芝村が話を進めていく。

「だからこそうやって移動中に通信を繋げて作戦内容の確認をしておるのだ。」

現在阿蘇では対幻獣用に開発中の特殊装備GXの実地テストが行

われており、我等はそれに付き合う格好だ。

G Xは幻獣に対して効果のある力場を形成するものらしいが、資料にあつたように、同時に”人体にも影響を及ぼす音波を発生させる”代物だ。

此方が被る影響を低減させる為に、G X発動直前から我等の通信は音声を完全遮断。士魂号も機外マイクの電源をカットしろ。

相互の通信は多目的結晶を通したメールで行うことになる。注意を怠るな」

同じ頃隊列の先頭を走る指揮車の中では現地部隊との通信が行われていた。

「こちら”黒猫”、この度そちらと共闘することになった5121独立戦車小隊指令の善行万翼長です。そちらの状況を教えて頂きたい」

『こちら”木曾屋”、実験部隊の指揮官を務める原瀧万翼長です。予想される敵の戦力は大型が5、小型が40。増援の可能性もありと報告を受けています。

現在我方は先の戦闘によつて戦車を全て喪失しており、打撃力を欠いております。

装置の設置を急がせていますが、残念な事に幻獣の実体化には間に合わない事が確定しました。

G X発動まで大型幻獣の抑えをお願いしたい』
通信に出たのは若い女性の声だった。

「了解しました。只今そちらから受け取ったデータを見ますと、そちらが戦闘を開始した5分後にこちらの戦車が突入することになります。

それまではなんとか持ち堪えて下さい」

『了解しました。それではくれぐれもG Xの影響に気をつけてくだ

さい。以上オーバー」

通信を終えると同時に善行は矢継ぎ早に指示を出し始める。

「状況は聞いている通り芳しくありません。

我々は現地で展開する友軍を支えると同時にGXの設置を援護する必要があります。」

突入地点は友軍の左翼端。ここから中央へ斬り込んで敵の注意を此方へ引き付けて、GXの設置の時間を稼ぎます。

来栖、若宮の両名は突入開始地点において最寄の現地部隊の戦車スルウツを護衛。随伴兵

一番機と三番機は中央に展開、二番機は後方からこれを援護して下さい。

総員戦闘準備！ 全士魂号クールよりホットへ」

5121の隊員の誰もがこの闘いが厳しいものになると認識はしてはいたが、よもや記録が封印されるような事態に陥るとは全く予想していなかった。

最初に展開を開始したスカウト2名、来栖くるす 銀河ぎんがと若宮わかみや 康光やすみつは、自分達と同じようにリテルゴルロケットを装備した友軍のスカウト達が、戦場に似つかわしくない奇妙な物を運んでいるの発見して困惑していた。

「なあ、俺にはアレが無線式のスピーカーにしか見えないんだが…

…」

「……任務は護衛だ。今はそちらを優先する」

「そ、そうか……」

無視することにしたようだ。

3機の士魂号は予定通りに展開を開始して敵の戦列の切り崩しに掛かるが、こちらにも混乱の気配を見せ始めていた。

最初の混乱は後方から92mmライフルで狙撃をしていた二番機から三番機への通信だった。

「こちら滝川。なあ芝村、ちょっと確認したい事があるんだけどいいか？」

「今は戦闘中だ。簡潔に述べるがよい、答えてやろう」

「サンキュな。……なあ、ウオードレスの武装に棍棒ってあったか？」

滝川の問いを理解するのに芝村は数瞬の時間を要した。

「いやな、スコープの先で久遠が1体、ゴブリン共をボールみたいにぶっ飛ばしてるんだけどよ、そいつが振り回してるのがどーみても金属バットにしか見えねえんだ」

久遠は女性専用のウオードレスで、戦闘用には珍しく女性らしさが見受けられるデザインだ。その分出力で他のウオードレスよりも劣る傾向にある。

そのような武装で大人の数倍の重量があるような幻獣を殴りつけて飛ばすとは、彼女の腕力は如何ほども物であろう。

「滝川、そなたの目は狂っておらぬ。WDウオードレスの格闘装備に鈍器は存在しない」

「そうか……、女ってこえーな」

どうやら彼に新たなトラウマが加えられたようである。

続いての混乱は一番機で発生する。

いつも通りに先陣を切っていた一番機が呆然と突如棒立ちになったのだ。

「壬生屋、どうしたんだ？ 戦闘中だぞ、何かあったなら報告するんだ」

「みおちゃん、たちどまったらめーなのよ」

「今視線の先でお1人闘っておられるのですが、ちよつとその……」
「壬生屋さん、とにかく見えている状況を報告して下さい」

指揮車でオペレートを担当する瀬戸口^{せとぐち}隆之^{たかゆき}と東原^{ひがしはら}ののみが呼び掛けるが、的外れな答えが返ってくるので善行は詳細の報告を命じた。

「その殿方が両手を額に当てると光が走って、それに中ったゴブリンが変な踊りを始めるんです。何か妙な格好をすると全身が強く発光するんです。その方が投げたハガキに様なものがミノタウロスに突き刺さっているんです！ なにより格好が……。覆面をしていて額に日の丸の扇子があつて袴^{かみしも}に腰蓑^{こしみの}に草鞋履^{わらじはき}きなんです！」

彼女の報告の内容は常識を疑うものだが、彼女自身がその現象を認めきれないのが声に滲み出ている。報告の終わりの方はもはや金切り声寸前だ。

その事実を確認する前に状況は勝手に動いていく。

「壬生屋、ゴルゴーンの射界に入ってる！ ミサイルだ、避ける！」

瀬戸口の警告が功を奏したか、一番機の被弾はゼロだった。代わりに例のスカウト（？）がミサイルの爆発に巻き込まれて飛ばされる。

「わたくしは大丈夫です。爆風に巻き込まれたあの方は……。いやあああ！」

報告の途中で暴走を開始した。

一番機が暴走して突出しすぎた為に置いてけぼりを食らう形となった三番機の中では、速水と芝村がつい先ほどの暴走について話し合っていた。

「全く、壬生屋は何を取り乱しておるのか。理解に苦しむ」

「そう？ 僕には何と無くだけど原因が予想できるよ、舞」

「ならばそなたの考え述べるがよい」

訝しむ芝村に促されて速水はその考えを明かしていく。

「壬生屋さんの報告に、その人の格好っていうか服装について言っていた部分があったよね」

「確か袴に腰蓑か？ 奇妙ななりであるのは間違いないが」

「うん、その格好が原因。爆発で引っくり返ったその人の腰蓑の”中身”を見ちゃったんじゃないかな？ その人って”それだけ”しか身につけていなかったんだよ、きっと」

「……そう言う訳か。壬生屋には刺激がきつかったか」
潔癖症

なにやら暢気な会話をしているようだが、この間にも三番機は大型幻獣を牽制しつつ小型幻獣を屠っているのだから、何かの冗談のように感じる。

そこに指揮車から通信が入る。

『済みませんが壬生屋さんをなんとか正気に戻して一番機の暴走を止めて下さい。GXの発動までもう時間がありませんので』

「了解した。厚志よ、一番機を追うぞ」

だが肝心の速水が返事をしない。

「どうした厚志よ、何を呆けておる」

返って来た返事は何んでもないものだった。

「ごめんね舞。この先で闘ってた人達んだけど、1人は両腕から、1人は両肩からミサイルを発射してたんだ。最近の科学ってすごい

ね」

「……とにかく壬生屋を追うぞ」

彼女にはどう答えていいか分からなかったなので、一番機を追うことを指示した。

三番機が一番機に追いつく頃、指揮車にGX発動準備完了の報告が届く。

善行はこれを受けて指示を発した。

「間もなくGXが発動します。作戦に従いスカウトは直ちにロケットに点火して補給車まで後退。再出撃に備えて待機して下さい。総員遮音状態へ移行。以後の通信連絡は多目的結晶のメール機能にて行います」

「指令、暴走中の一番機はどうします？」

瀬戸口の発したのは質問ではなく確認だった。

「GXの発動までに正気に戻ることを期待しましょう。どのみち我々にはそれしか打てる手立てはありません」

そうして5121はほぼ全員が遮音体制に移行した。そう”ほぼ全員”である。

後方から狙撃の傍ら一番機と三番機の動向を観察していた滝川は、遮音の指示が下るとほぼ同時に周辺のスカウト達が次々と背後のロケットに点火して後退して行くのを眺めていた。

彼の不幸は彼らの一系乱れぬ後退に見とれて遮音に入るのが遅れたせいで、自分の好みの音楽が聞こえて来てしまった事にある。

「お？ これは”超辛戦士レッドペッパー”イメージソングのイントロじゃねえか。俺もいっちゃ歌うとするか！」

だが彼の意識は数秒後に途絶えることになる。

同時刻、一番機もGXの影響をモロに受けてその行動を停止していた。

『一番機と二番機、行動停止。パイロットは気絶した模様。尚、幻獣は撤退を開始しました』

瀬戸口からある意味残酷な報告が善行に届く。

『幸い二番機の周辺は幻獣が確認されていません。当分は放置しても大丈夫でしょう。三番機に一番機の護衛に付くように指示を』

だが事態はここで更なる悪夢の方へと転がっていく。何時に無く大規模な増援が実体化を開始したのだ。

この増援を受けて幻獣側は撤退から反転攻勢に転じ始める。

残った数少ないスカウトと5121三番機の報告から増援スキュラ4体が含まれているのが判明し、実験部隊はGXの出力増強を決定した。

『GXの出力を上げるぞ。例の二人、盛田と武井を配置につける！』

GXの出力増強の報を受けた直後、5121は壊滅的な被害を受けていた。

指揮車の中では東原が『たかちゃん、きもちわるいよ』と文面を発すると同時に気を失った。

その直後には銃座に待機していた石津いしづ萌もえが床に落下してくる。

その振動に気がついて振り向いた善行と瀬戸口に下に『呪うわ』と単純極まりない一文が届くが、普段の口調以上に禍々しさを感じたのは気のせいではないだろう。

何しろ彼等も耐え難い不快感に苛まれていたからだ。

加えて言うならば補給車の面々は、車外で待機していた為か既に全員が気絶していた。

その頃の三番機はというと、こちらも行動を停止していた。違う点があるとすれば、搭乗者がどちらにも正気を保ちつつ状況を観察する余裕を辛うじて余していた所であろう。

『ねえ舞、増援が一戦もすることなく撤退していくけど、これってGXの効果だよな』

『そう考えるのが合理的であろう。しかし戦場では使い勝手が悪いとしか言えぬな。味方の被る影響が無視できぬ』

『幻獣が寄って来ないようには出来るんだろうけれど、使い方が難しいね』

この日の戦闘で5121は対策を施していたにも関わらず、ほぼ全員が行動不能となった。

撤収作業に入ることが出来たのは、GXが停止してから30分後、気絶から回復してからであつたのを追記しておく。

この1戦で十分なデータの蓄積が完了したのか、5121は翌日には元の戦域の担当に復帰させられることになる。

尚、この日のデータは十二分に活かされて後の熊本城攻防戦で装置の名称を変えて使用される。

「奴らの逃げ道を塞ぐぞ。結界機の準備を急がせろ！ それと盛田もりたひろあきひろあき、弘明十翼長ひろあき、武井たけい助久保十翼長すけくぼ、そしてグリコーゲンエックスX十翼長ヘンタイ以上の3名をそれぞれ結界機につけるんだ！」

熊本城攻防戦の当日、封じ込めラインでは終日様々な歌が大音量

で流されていた。何人たりとも耐えられぬほどの外れた音程で。

多大な戦果と戦禍^{げつか}を基^きに一応の形を見た結界機^{ぎせい}であつたが、この1戦を最後に永久封印となり、以後の如何なる闘いにおいても使用されることは無かつた。

（後書き）

本作品は如何だったでしょうか？

わたくし闇目の処女作品になります。

GPMの舞台が九州ということで、”あの皆様”にご登場願いました。

感想・アドバイスなどがあれば宜しくお願い致します。

今後の参考とさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3253s/>

熊本戦線異状ナシ？

2011年10月8日23時11分発行